

---

# ジョーンブリヤン

彩杉 厚智

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジョーンブリヤン

### 【Nコード】

N0326Z

### 【作者名】

彩杉 厚智

### 【あらすじ】

光太郎は中学三年生。母、葵の見舞いを日課として暑い夏を過ごしていた。葵は2年前に交通事故に遭っていた。そのとき幸い一命は取り留めたものの脳に影響が残り毎日午後4時半頃に目を覚ますが2時間経つと眠ってしまうという特異な症状を抱え入院生活を続けていた。そんな光太郎が迎えた高校受験まであと半年という二学期の初日。クラスに佐伯という名の大人びた外見で他人を寄せ付けない雰囲気をもった女子生徒が転入してきた。美術を強く志す佐伯は美術部OBの光太郎に部に入るにはどうしたら良いかと持ち

かけてきたため幽霊部員だった光太郎は困惑しながらも何かと世話を焼き、勉強まで教えることになってしまった……。中学生の拙い初恋と夢をテーマに。

自転車が揺れるたびにカゴに入れた一輪の小ぶりなひまわりがイヤヤをするように左右に顔を振る。

もつと優しく扱ってよ、ただでさえ暑いんだから。

そんな声が聞こえてくるようで僕はハンドルを握る両手にさらに力を込めた。ひまわりには申し訳ないがスピードを緩めるわけにはいかない。僕にできることは汗で滑りそうになるハンドルをしつかり握り少しでも自転車の揺れを少なくすることだけだった。

巨大に膨れ上がった夏の太陽が轟々と音を立てて熱波を送ってくる。

その太陽を正面に見据えて突き進む自分の姿に僕はイカロス进行い浮かべる。警告を無視して太陽に近づきすぎ羽を失って墜落したギリシャ神話の孝行息子。スチール製の自転車もこの暑さの前では蠟のように溶けてしまいそうだった。

そう言えば昨日父に「明日からまた暑くなるらしいから熱中症に気をつけるよ」って言われたんだっただけ。

確かにまとわりついてくる空氣の熱さは尋常ではない。自転車を漕げば漕ぐほど体温は上昇し頭の奥がぼーっとしてくる。

僕は一旦自転車を止め肩から襷に掛けたスポーツバッグからペットボトルのコーラを取り出した。半分ほど残っていた黒い液体を喉に流し込む。

先ほど買ったばかりなのにすでに湯気が出そうなほど熱くなっていて甘ったるいだけで清涼感はない。

病室の備え付けの冷蔵庫で冷やしなおそうかとも考えたが僕はそのままペットボトルの底を空に向けて飲みほした。身体に悪いから、と炭酸ジュース嫌いの母さんの目にとまればまた小言を言われるに違いない。

とりあえず水分補給という作業を完了し僕はペダルを強く踏み込ん

だ。

間もなく五時だ。母さんはもう目覚めているかもしれない。

僕はどんどん加速した。両手を広げればそのまま空へ浮き上がりそつなぐらいにスピードを上げた。勢いそのままに駐輪場に突進する。

病院に駆け込み仁科葵とネームプレートの掛かった母の病室の前に立つともう一つ奥の病室のドアが開き、若い看護婦が大きな花束と空の花瓶を抱えて出てきた。

反射的に僕は手にしたひまわりを後ろ手に回してその女性とすれ違う。彼女が手にしている絢爛たる花々と比べると僕の萎れ気味のひまわりはやけにみすばらしく見えた。

ひまわりの一輪挿しなど余計に病室を寂しくさせるだろうか。しかも大分くたびれてきているし。

僕は頼りなさげに見える細い茎を弄んでひまわりをくるくると回してみよう。

「可愛らしいひまわりね」

声の方を振り返ると花束と花瓶を抱えたままの先ほどの看護婦がにつこりと笑いかけてくれた。

僕はその笑顔に少し勇気をもらって小さく頷くと母さんの待つ病室のドアに手を掛けた。

「光太郎っ！」顔をのぞかせると待っていたとばかりに窓際に立っていた母さんが声を掛けてきた。「早く、こっちこっち」

「起きてたんだ。ごめん、遅くなって」

「そんなこといいから、早く早く」

母さんは無邪気な声で僕を呼ぶ。それはまるで新しい洋服をデパートに買いに来た少女のようだった。窓から入り込む西日に頬を輝かせた母さん。そのコロコロと響く声は入院患者とは思えない陽気さだ。ここが病室でなく、母さんがパジャマを着ていなければ誰も母さんのことを病人だとは思わないだろう。

「ほら、あそこ」

母さんが指さした窓外の病院の壁になにやら茶色い小さなものが見える。あの形は昆虫のようだ。

「蝉の抜け殻？」

「そうよ。きつと昨夜のうちに幼虫がこんなところまでえっちらおっちら上がってきて、ここで羽化したのよ。見たかったわね、蝉が殻を破って飛び立っていくところ」

「そんなの」

見たくないよ、と言いかけて僕は口を噤んだ。

どちらかと言うと母さんは虫が苦手だったはずだ。僕がつかまえてきた小さなてんと虫が家の中を飛び回っただけでパニックになったし、ゴキブリなんか見るのも嫌で絶対に新聞紙で叩けない。カブトムシやクワガタはそのゴキブリの親戚だと言ってきかない。そんな母さんが昆虫の羽化の瞬間を見たいと言っていることに切ない気持ちになる。

きつと母さんにとってこの病室での生活がそれほどに味気なく張り合いに欠けるものなのだ。

「あら、ひまわり。小ぶりでかわいい！」

母さんの笑顔が一層明るくなる。

その表情に僕は心の中で快哉を叫ぶ。

母親を見上げる無邪気な幼児のように健気に太陽に顔を向け続けるひまわり。それは母さんの大好きな花だ。だから僕はこの季節には通学路や校庭でひまわりが咲いているのを見つけると罪悪感に苛まれながらも必ず失敬してくる。

「あ、早く活けなきゃ」

僕はベッド脇の四角くて細長いガラスの花瓶を掴んで洗面所に向かう。

すっかり俯いてしまっているひまわりを水に差し部屋に戻ると白衣を着た医師がベッドの脇に立っていた。

ベッドの上に座り血圧を測られている母さんが医師の向こうから小さく手を振る。

僕は、こんにちは、と医師に挨拶をして花瓶を窓際に置き処置が終わるのを待つ。

ピピピと電子音が鳴る。母さんが脇から体温計を取り出すと、医師は無言で受け取って病室から出て行った。

入れ替わりに僕が母さんの横に移動してパイプ椅子に腰を下ろす。

「あの先生、独身かしら？」

母さんは少し乱れたパジャマを直しながら医師が出て行ったドアに目をやる。

「さあ」

「あんなに大人しくつちや一緒にいても面白みがないわよね」

「でもお医者さんって儲かるでしょ。だったら結婚したい人もいるんじゃない？」

何の気もなしにそう言うのと母さんはじつと僕の眼を覗き込んできた。

「中学生の光太郎には分からないかもしれないけど、お金じゃないのよ、夫婦って」

将来を憂うような重い口調で言われても困るって。一般論として思いつきで言っただけなんだから。

僕は話を変えるためにスポーツバッグの中を漁った。本屋の袋を取り出し母さんの膝の上あたりに置く。

「はい、これ」

「ありがとう。いつも悪いわねえ」

全然悪いとは思っていない調子で母さんがにんまり笑う。

中身は三十代の主婦層をターゲットにしたファッション雑誌だ。毎月これを買うのが僕の一番手を焼く任務と言える。

買い始めて二年近くになるが未だにコンビニエンスストアのレジでは赤面してしまつて店員さんの顔をまともに見ることができない。しかしそんなことはあっけらかんとした性格の母さんはきつと思ひもよらないだろう。

工口本を買うのとどっちが恥かしいかな。友達から借りることは

あつても自分で買ったことはないから分らないけど。

「あら、こういうのってかわいいわね。ね？ね？」

母さんは早速雑誌をペラペラめくり出し、気に入ったものを見せにくる。

しかし中学三年生の僕は同世代の女子がどんな流行を追っているのかも理解の外。もちろん三十代の主婦の恰好に良し悪しを言えるほどのファッションセンスを持ち合わせているわけがない。決まって上辺だけの「そうだね」を使うのだが、母さんは僕がどう言うのを期待しているわけではないようだ。鼻歌交じりに次々とページを繰っていく。

母親の若作り。見ているこっちが落ち着かない気分になるから、「母さんはもう四十過ぎてるじゃん」って毒を吐きたくなるけど、やめておく。ずっと病室でパジャマ生活の母さんにとってこの雑誌の中の世界ってどんな風に見えるのかな。そう考えるとじりじりと胸が痛い。

「そう言えば明日から二学期ね」

一通り目を通して気が済んだのか雑誌を閉じて母さんが少し遠い目をして微笑む。毎日院内だけの生活の母さんが今日で夏休みが最後だということに気づいていたことに僕は少し驚いた。

「そうだよ。って言ってもこの一週間毎日補習授業で学校通ってたからあんまり新しい学期が始まるって感じはしないけど」

「どこ受けるか決めたの？」

「高校のこと？」

「他に何か受けるものある？」

「そりゃそうだけど・・・」僕は少し間をとって口を開いた。「K高かなって思ってる」

僕は近くの県立の高校の名前を挙げた。この辺りの公立の中では一番レベルが高いが僕の成績なら落ちることはないという自信はある。

「どうして？」



意外にも母さんはまるで嫌いなピーマンを病院食の中から見つけたときのような苦い顔をした。僕の答えに納得していないようだった。

何故だろう。僕の学力を心配しているのだろうか。

「どうしてってレベル的に大丈夫だと思うから」

「T学園じゃなくて良いの？」

母の言葉に僕は不意を突かれたような気持ちになった。

T学園は県内屈指の全国的にも名の知れた私立の進学校だ。僕が通っている中学校からも毎年二、三人は進学しているようだが、僕の今の成績では客観的に見て合格できるかどうか怪しい。

「ちよつと厳しいかな」

「何が？」

「俺の頭では」

「そうなの？」

「そうだよ」

「光太郎って頭いいんでしょ？」

「そんなことないよ」直球でそんな風に訊かれると否定するしかないじゃないか。「とにかくT学園は俺にはレベルが高いの」

母さんはまだどこか不満そうだった。

一人息子をT学園に、と期待していたのだろうか。そんな教育ママだったつけ、この人。

正直、今、母さんにT学園って言われるまで僕はあまりその学校を意識していなかった。受験まであと半年しかない。それなのに来年どこの高校に通うかはまだ真剣に考えたことがなくて、漠然とだけどK高に行くんだらうなっと思って思いこんでいた。

「本当は、お金のことなんじゃないの？」

そういうことか。母さんが気にしているのは、うちは余裕がないからって理由で僕が私立のT学園を諦めたんじゃないかってことみたいだ。

「もう少し頭の出来が良かったら頼み込んででも行かせてもらっ

だけだね」

僕は今、親に二つ嘘をついた。

一つは頭のこと。

今の僕の学力から判断してT学園は、全然歯が立たないってわけではない。残り数カ月、死に物狂いで勉強すれば何とかなるかもしれない。今の時点で厳しいからと見切りをつけるのは時期尚早だ。

もう一つは意気込み。

他の同級生も同じだと思うけど、僕は高校に対してあまり興味を持っていない。K高に行ったって、T学園に通ったって人生そんなに変わらないだろうって思っている。

中学三年生の僕にはまだ人生の目標なんて全然見据えられていないし、こんなことをやりたいからっていう明確な志望動機を高校に対して持っていない。自分の学力レベルにあった分相応の高校。そういう物差しでしか高校選びなんてできない。だからたとえ頭の出来が良くても頼み込んでまでしてT学園に行きたいかどうかは分からない。

母さんにT学園の名前をあげられたとき、僕の体は軽い拒否反応を示して反射的に否定的な言葉を発していた。きつと頭の中で、T学園に行くにはこれから毎日毎日しんどい思いをして机に齧りつかなくてはいけないこととか、K高ならうちの中学校から二、三十人は行くけどT学園に入ったら知らない人ばかりで寂しそうだとかいうつまらないマイナスなイメージを作り上げてしまったのだから。

まあ僕の高校進学への想いというのはこの程度のものである。

でも母さんはとりあえず納得したようだった。

「くれぐれもお金のことは心配しないでね。そういうのは何とでもなるんだから。・・・じゃあ、少し横になるね」

母さんは瞼の重さに耐えきれない様子でベッドの中に横たわった。時計を見ると六時半を過ぎたところだった。

顔を戻すともうすでに母さんは静かに寝息を立て始めていた。

窓の外はまだまだ夏真っ盛りだ。朝っぱらから辟易とするほどの暴力的な強い日差しには教室の安っぽいカーテンではとても歯が立たない。

窓際に座る僕の特に左半身はカリカリと焼けて今にも身体の中の何かが融け出しそうだ。

「おはようございます。みんな、元気そうね。安心したわ。夏休みの間、怪我とか病気とかした人はいないみたいね」

担任の坂本先生はこの暑いのにブラウスの上にカーディガンを羽織っている。冬になると、モコモコとこれでもかと言うほど重ね着をして、しきりに両手をこすり合わせたり足踏みをしたりする極度の冷え症だ。まだぎりぎり二十代だったと思うが中学生の僕から見ても色気がない。

「俺は心に傷を負ったよ」

教室の一番後ろの席からクラス一の調子者の遠藤が茶々を入れる。

「遠藤君、どういうこと？」

「彼女に振られたってことさ」

教室内が一気に沸く。

かわいそう。良い気味だ。原因は何？彼女って誰だったの？そもそもお前、彼女いたんだっけ。色々な声が錯綜する。

「それはそれは。中学最後の夏休みの思い出としては少しセンチメンタルね」

「俺の夏は早々と終わったわけさ。先生はどうだった？」

「何が？」

「今年の夏は彼氏できた？」

再びどつと歓声が上がる。クラス全員が目を爛々と輝かせて教壇に顔を向ける。

「先生のことはいいのよ。先生のことは・・・」

まさかの展開という感じで坂本先生は教卓に目を落としチョーク箱や出席簿に意味もなく手を伸ばしたり髪を掻きあげたりとしどろもどろになっている。

彼氏できたの？彼氏と海に行った？何やってる人？芸能人で言えば誰に似てるの？

四方八方から火の手が上がり四面楚歌という感じの教室に坂本先生の顔が引きつる。

「彼氏なんかそう簡単にできないわよ」

芝居つぼくがつくりと教卓に手をついて見せた担任教師に生徒たちは追い打ちをかける。

「今年の夏も一人だったんだ。かわいそ」

「山田、お前付き合ってたやれよ」

「坂本先生なら俺は構わないけど」

教室内が笑いの渦となる。ホームルームからこんなに盛り上がっているのはうちのクラスだけだろう。そろそろ隣のクラスの担任からクレームが飛んできそうだ。

「もう、私のことはいいから静かにして。今日は皆さんに特別に報告しないといけないことがあるのよ」

さすがに坂本先生の声にも怒りの色がこもってきて、敏感な生徒たちはぴたっと口を噤む。

普段は柔和な彼女も数年前に一度キレたことがあったようだ。言うことを全く聞かない男子生徒を思い切り平手打ちにしその生徒が口の中を出血してカッターシャツがどんどん赤く染まっていくのに保健室に行くことも許さず平然と最後まで授業を進めたという伝説を誰もが知っている。彼女は空手の有段者だという噂がまことしやかに流れている。

「今日からこのクラスに新しいメンバーが加わるの。佐伯さん、入って」

名前を呼ばれてゆつくりとドアから現れたのはハツとするほど白い肌の少女だった。

彼女は緊張している様子もなく堂々と胸を反らせて手招きする教師に近づいた。教卓と黒板の間に立つ。サツと正面を向く。

瞳を隠す長い前髪。表情を殺した緩まない頬。彼女は唇だけを動かしてハキハキと挨拶をした。

「佐伯杏奈です。よろしくお願いします」

軽くお辞儀をするとすぐに顔を上げ睥睨するように右から左へと視線を飛ばす彼女。

クラス全体がビクツと固まる。少なくとも僕は彼女の顔がこちらを向いたときに慄然としてその瞬間は暑さを忘れ思わず背筋を伸ばしていた。

すらりとしたスタイルの良さと中学生とは思えない大人びた顔つき。彼女は隣にいる坂本先生がかわいそうに思えるぐらい色っぽい、そのひんやりとした美しさのためか容易には近づきがたい雰囲気がある。

「ということで、今日から同じクラスメイトとして皆さん仲良くねじゃあ、佐伯さんはあそこに座って」

坂本先生が指したのは窓際の最後、僕の後ろの席だった。そう言えば朝教室に入ってきたときに、こんなところに机あったっけ、と思った覚えがある。

しかし、まさか中学三年の二学期に転入生が現れるとは思ってもよらなかった。

転入生には何かしらの事情が付きものだが、卒業まで半年ほどのこの時期にとは佐伯家に余程の事情があったのだろ。しかし、そんなことを訊こうものならどういう仕打ちが返ってくるか分からないという不気味さを彼女はオーラとして纏っている。

顎を引き涼しい顔つきできびきびと彼女が僕の方に向かって歩いてくる。

僕は何となく視線を合わせてはいけないような気がして机に目を落とした。横を通り過ぎた彼女が作る空気の流れが妙に冷たくてこの暑いなか僕の腕に鳥肌が立った。

「おい、光太郎」

下駄箱に向かって廊下を歩く僕の背中にクラスメイトの松本陽平の声が追いかけてくる。

彼はサッカー部のキャプテンを務めていた。この夏で部活動は引退した格好だが、県選抜の実力を持つ彼は高校へはスポーツ推薦での進学が決まっただけで夏休み中も後輩たちに混じって練習を続けていたようだ。おかげで陽平は三年生の中では誰よりもこんがりと日焼けしていた。

そう言えば陽平が進学するのは母さんが口にしたあのＴ学園だ。

Ｔ学園はそのブランド化されたと言っても良い知名度を維持するためこれまでの学力重視の方針を転換し近年はスポーツの面にも力を注ぎ少子化の現代でも生徒集めに不安はないと評判だ。僕もＴ学園を受験し合格すれば校内に陽平という知り合いは確保することができる。しかし、スポーツ推薦の生徒と一般試験での合格者は同じクラスにはならないから孤立感を拭うことには全然つながらない。

「何？」

「今から、沙織たちとカラオケ行くけど、来ないか？」

隣のクラスの沙織は清纯や可憐という言葉がぴったりの学年で、いや、校内で一番の美少女だ。そんな沙織とお近づきになれるシチュエーションが僕の胸にもたらした波動は決して小さくはない。だが、僕は表面上はそれを平然と押し殺した。

運動神経抜群でしかも聡明な顔立ちの陽平は女子からもてる。毎年バレンタインデーにはアイドル顔負けの到底一人では食べきれない量のチョコレートをもらっている。来年３月の卒業式には陽平の周囲でいったいどんな騒ぎが起きるのだろうと羨ましいような怖いような気分で想像するのは僕だけではないはずだ。その陽平の口から沙織の名前を聞いて僕には負け惜しみではなく素直に二人がお似

合いだと思った。そんなところにお邪魔してもいたたまれないだけのような気がする。

「サッカーは？」

「たまにはサッカーから離れて気晴らしするのも重要なんだよ」

「陽平の人生において？」

僕は意地悪そうに笑う。しかし、陽平はいたって真面目な顔つきで頷いた。

「そう。俺の人生において」

陽平とは二年生のとき初めて同じクラスになって話すようになった。4月のクラス替えで隣の席になり、5月、6月とくじ引きで席替えをしたのに三ヶ月連続で左右隣同士になって陽平が声を掛けてきたのだ。

「この三ヶ月隣同士になったけど、これってお互いの人生においてどういう意味を持つことになるんだろうな？」

比較対象にするのもおこがましい程のイケメンからいきなり席順の人生における意味を問われて僕はただただ困惑した。しかし、それだけ考えても僕の頭の中には一つの熟語しか浮かんでこなかった。

「偶然じゃない？」

口に出してから後悔した。

偶然。なんと空虚な響き。

折角我が校のアイドルと仲良くなれるチャンスだったのに、面白みに欠ける奴だと思われたのではないだろうか。

僕は陽平の次の言葉を固唾を飲んで待った。彼は黒板を睨みながら腕組みをして押し黙ってしまった。

「じゃあさ、来月も隣同士になったとしたらどう思う？」

漸く口を開いた陽平はさらに僕を試してきた。

僕は陽平の真意を測りかねていた。彼はこの自分でも嫌になるくらい平凡な容姿の僕をからかっているのだろうか。いや、何故かは分からないが僕は今彼に試されているのだ。誰かこの質問の本当の意味を教えてくれ。いったい正解は何なのか。

僕は自棄気味に口を開いた。

「奇跡じゃないかな」

一瞬「だよねー」と言っただけで僕の手を取るかと期待した。しかし陽平は僕の答えに何の感慨も示さず低い声で「そこまでは言えないな」と呟いただけだった。

ドキドキしながら待った7月の席替えで僕の席はとうとう陽平の横から外れた。前後になってしまったのだ。

僕の前の席に座った陽平はにっこりと振り返りやっぱり問いかけてきた。

「これはどういう意味なんだ？」

「縁、だと思っ」

縁か。縁ね。

陽平は今回は満足そうに頷いて正面に向き直った。

それから陽平は身の回りの物事について意味を僕に問いかけてくるようになった。

晴天が十日続いた意味。新しく使い始めたばかりの消しゴムを失くしてしまった意味。オリンピックが四年に一回である意味。

それを僕は真面目に考える振りをしながら思いつきで適当に答える。その返答に彼は大抵はどこかつまらなさそうに頷くだけなのだが、ときおり琴線に触れるのが男の僕でさえ蕩けてしまいそうな甘い笑顔を見せてくれることがある。僕の答えのどこがどんな風に良かったのかは全くこちらに伝わっては来ないのだが、その笑顔の瞬間には心の中でガッツポーズしてしまう。

将来はプロのサッカー選手になると公言しそのための努力を惜しまない陽平を僕は心から尊敬しているが、そんなやり取りを通して僕は単なる運動馬鹿ではない哲学的な面を見せる彼を愛していた。そう言えば今の席は僕が窓際で彼が廊下側と目も合わせられないような距離になっている。

「陽平はいいとしてもみんな受験勉強は？」

沙織はどこの高校を受験するのだろうか。K高校ならこの先三年



間毎日のように彼女の顔を見ることができるとはいいのだが。

「さあね。遊びにこれるぐらいなんだから大丈夫なんだろう」

少し自分本位で他人のことに気が回らないところがある陽平らしい物言いだった。しかしそんな言い草も妙に納得してしまう。

陽平は常に自信に満ち溢れていて、しかもそれが嫌みではない。彼の周りにはいつも人がいる。彼の魅力は太陽のように人に求められ人を照らしている。

「光太郎もたまには息抜きした方がいいぞ。どうせお前ならK高校だつて楽勝だろう」

僕が周りにひけをとらないことと言えば勉強だけだ。中学に入ってからテストで学年のトップテンを逃したことはない。K高校は公立では一番の進学校だが校内三十位程度に入っていればまず大丈夫と言われている。

「どうする？」

「カラオケかあ」母さんが目を覚ますまでにはまだ時間はある。しかし、僕はカラオケが得意ではない。自分の声がマイクを通して部屋中に響き渡っている状況にどうにもなじめないし、誰かが得意げに歌う曲にあわせて身体を揺らしてリズムを取るのも苦手だった。女子がいるならなおさら緊張して上手にできないだろう。あまり楽しそうなイメージは思い描けない。「俺は、やめとくわ」

「今日も、病院か？」

「まあ、そんなところ」

僕は軽く眉を顰めて見せた。

気が乗らないときはいつもこの手で逃げている。嘘ではないが、100%頷くこともできない。

「あ、いた。仁科君」

僕の顔を見つけて小走りに寄ってくる坂本先生が陽平の肩越しに見える。僕に何の用だろうか。

「じゃあ、また今度な」

陽平はあっさり引き下がった。

僕みたいなパツとしない人間にも声を掛ける優しさや、誘いを断られても軽く受け入れてくれる淡泊さも彼の魅力の一つだと言えるだろう。

「おう」

坂本先生と正反対に走り去っていく陽平に手を挙げて僕は坂本先生を待った。

坂本先生はおそらく150センチメートルもないだろう。決して背の高い方ではない僕とでも向かい合うとかなり見上げる格好になる。

「仁科君。来週の実力テストが終わったら父兄の方と進路について面談することになってるんだけど、仁科君の場合、お父さんになるよね」

坂本先生も当然母さんが入院していることを知っている。

「そうですね」

「仁科君のお父さん時間作れそう？もしお忙しいのならお父さんの都合の良い時間に家庭訪問させてもらってもいいんだけど」

僕の父は県立博物館に勤務している学芸員だ。

去年のこの時期に県内の工場跡地から古い陶器の欠片が見つかり、それが室町時代のものだということが判明して以来、父は急に多忙になった。学生時代に大学院まで進学して考古学を専攻していた父は当然のように発掘チームにしかもリーダーとして組み込まれてしまった。博物館の仕事はそっこのけで発掘現場に派遣されることになったのだ。

日本史の教員である坂本先生もそのことを知っているのだろう。

「父の予定はちょっと僕にも分からないんです」

発掘が始まってからは毎日早朝に家を出て夜遅くに帰ってくる父とは会話をする機会が少なく、この生活リズムがいつまで続くのか全く読めない。発掘のことはよく分からないが、実際携わっている父でさえも見通しが立たないような状況なのではないかと想像している。

「そうよね。発掘だもんね」

坂本先生の声にはどこか羨ましが滲んでいるように聞こえた。日本史を生徒に教えるような人にとって父の仕事は興味深く羨望の的なのかもしれない。

「どうするか聞いてみます」

「うん。時間の調整が必要だからお父さんから学校に電話してもらえると助かるかな。お願いね」

坂本先生と別れて下駄箱に向かう。

これからどうしようか。今から病院に向かっても一時間は母さんは起きないだろう。でも学校にいる理由もない。

下駄箱の向こうから差し込んでいる西日と言うには強すぎる陽光に目が眩む。肌を焦がすような暑さがそこにある。今、外に出るのは得策ではない気がした。図書室で涼みながら勉強でもしようか。

「おい、光太郎」

デジャブのようだ。陽平が呼んだのではない。聞き覚えのない女性の声だったからだ。

女子にこんな風に馴れ馴れしく下の名前で呼ばれたことはない。

僕はどぎまぎしながら後ろを振り返った。

そこにはあの転校生が仁王立ちしていた。ホームルームのときの見下ろすような冷やかな視線を長い前髪の間から無遠慮に容赦なく僕に浴びせてくる。

僕は首を竦めるような気持ちでおずおずと佐伯と向かい合った。

「呼んだ？」僕の問いに彼女は小さく顎を引いた。僕は彼女の意図を探るため前髪の間から隠れている瞳に目を凝らした。「何？」

少し声が上ずってしまう。

彼女が僕に何の用だというのだろう。彼女とは今日会ったばかりで、もちろん話すのはこれが初めてなのにどうしてこんなにも気安く呼び捨てにされるのだろう。

女子と話す緊張よりも、展開が読めない不安が先に立つ。

「光太郎ってさ、美術部でしょ？」

彼女は僕の目の前に立ち長い髪を指先で掬い耳に掛けた。黒髪の奥から露わになった少し尖った耳の形と白さが僕の目に焼きついた。うなじに浮かんでいる柔らかそうな産毛の存在に見てはいけないものを盗み見たような後ろめたさを感じてしまふ。僕は思わず視線を床に落とした。

「なんでしょ？」

確認する彼女の声に軽い苛立ちが漂う。

叱られたような気持ちでハッと顔を起こすと僕の目を覗き込むような彼女の力のある眼差しとぶつかった。

「そうだけど」

多少否定したい気持ちを抱えながら僕は頷いた。

確かに僕は美術部に在籍していたがそれは「仕方なく」であり形だけのものだった。

この中学校は部活動を重んじていて生徒は何かしらの部に在籍すべしという校則がある。それで「仕方なく」美術部に入部したのだが、その選択に当たっては母さんの見舞いという事情を考慮したわけではない。

運動が苦手。ブラスバンドのように華やかなイメージがつかまとうのも苦手。囲碁将棋はルールが分からない。結果、消去法の末に残ったのが一人で黙々と作業ができる美術部だったというだけだ。

しかも美術に特筆すべき思い入れがあるわけでもない僕にとって美術部は帰宅部。最低限の活動には参加したが本気モードの部員からしてみれば爪弾きにしたい存在の幽霊部員だっただろう。「だった」と過去形なのは一学期の終わりに引退作品を完成させて三年生は全員引退したからだ。そういう意味でも僕は佐伯の問いに首を横に振りたかったのだが、それを口にしたら、つまらない屁理屈をこねるな、と怒られそうなのでやめておいた。

「良かった」

佐伯が小さく笑ったのを見て、僕は少なからず驚いた。彼女の顔は眉一本動かない鉄仮面ではなかった。彼女がこつこつと簡単に笑顔を

見せるとは。僕はこの掴みどころのない転校生が急に近い存在になったように思えた。

「どうして俺が美術部って」

「さっき、さかもつちゃんに聞いたのよ。この学年に美術部員いませんかって。そしたら確か仁科君がそうよって」

「そ、そうなんだ」

転入初日からいきなり担任教師を「さかもつちゃん」呼ばわりとは。やはりこの御仁は何を考えているのか分からない。

「ねえ。あたし、美術部に入りたいの。どうしたらいい？」

「え？今から入りたいの？」

「入れないの？美術部は転校生入部お断り？」

「そういうことはないと思うけど。三年生はもう引退したんだよ」「絵を描くのに引退なんかない」

そういう問題ではないと思うけど。しかし、胸を張って言われると僕は反論できなかった。

「梶田先生に相談すればいいんじゃないかな」

僕は逃げるように美術の教師で部の顧問の名前を挙げた。

ただ、この顧問は僕に輪を掛けて幽霊的存在で僕が在籍している間に部員の指導に現れたことは一度もなく、絵筆を持った姿すら見たことがない。自分が美術部顧問であるということを認識しているかどうかさえ甚だ疑わしいような教師だ。だからこそ三年生の佐伯がこの時期に入部したいと言い出しても軽く「ご自由に」と言いそうな気はするが。

「カジカジはどこにいるの？」

「えっと」僕はカジカジが梶田先生を指しているのだと思い至るまでに少し時間がかかった。彼女は誰にでもあだ名をつけないと気が済まないのだろうか。「職員室かな。でなかったら美術室の準備室か。目がチカチカするようなワイシャツ着てるからすぐに分かるよ」

梶田先生の色遣いのセンスは、さすが美術教師、凡人には理解できない、と校内で評判だ。どこで売っているのか見当もつかない光

沢のあるテロテロの生地に原色をちりばめた柄は遠目で見ても梶田先生だとすぐに分かる。

「連れてって」

「え？」

「職員室も美術室も場所分らない」

僕は気がひけた。

職員室は生徒なら誰しも足を踏み入れたくないところだし、美術室に行つて後輩の邪魔をするのも嫌だった。引退した先輩幽霊部員の顔など誰も覚えていないだろうがこちらとしてもどんな顔をして入って行けば良いのか分らない。

何とか彼女から逃れる術はないだろうか。僕の心はすでに後ずさりしている。隙あらば駆けだす算段だ。

「職員室はすぐそこだし、美術室はこの校舎の3階・・・」

「カジカジの顔も分らない」

眉間を曇らせて目を細めた彼女の不機嫌そうな言葉に囚われて僕は鬼軍曹に命令された一兵卒として背筋をピシッと伸ばし先に立つて歩き出した。

味噌汁を椀につけながら僕は父の様子を盗み見た。

仕事からの帰りしなに近くのスーパーで買ってきたというアジフライを皿に載せ電子レンジで温めている父。その背中は最近少し小さくなった気がする。

首筋や手の甲の肌は赤茶けていてまるで古いレンガのようだ。見るからにカサカサとしていて張りや潤いというものが全く感じられない。少し力を加えればぼろぼろと崩れてしまいそうだ。汗を出すとか温度を感じるとかいった皮膚としての機能は恐ろしく低下しているに違いない。ろくに手入れをせずにこの夏の強烈な日差しを毎日浴び続けた結果がこれなのだ。汗と土埃が複雑に絡み合ったような餿えた加齢臭を周囲に振り撒いていることに父は気付いているのだろうか。

普段は学芸員として特別なイベントがあるとき以外は残業などほとんどなく週休二日をしっかり守っていたのだが、発掘が始まって以来父は早朝に家を出て夜遅くまで帰ってこず、しかもほとんど毎日出ずっぱりだ。

チーム編成が発表される前からテレビや新聞で例の陶器のことが取り上げられると食い入るようにつめていた父が発掘に直接携われることを喜ばないはずがなかった。「戦国時代の武家屋敷跡だろう。この地域ではこういう発見がなかったから当時の生活様式を知る上で貴重な資料が出土するかもしれない。町のPRにはもってこいだ」と熱い口調で僕に説明していた父は母が入院して以来一番生き生きとした表情を見せていた。

あれからもう一年が過ぎている。

発掘の進捗状況はどうなのだろうか。果々しいとは言えないということは久しぶりに夕食に間に合うように帰ってきて疲れ気味に肩が落ちている父の様子を見れば僕には分かる気がした。

「明日は久しぶりに休みだから俺が朝起きてこなくても心配するなよ」

テーブルについた父は味噌汁を啜りながら僕の顔を見ることなく言った。

父の声は何となく僕の耳になじみがない感じがした。そういえばこの一年間父子の会話はほとんどなかったのだと思い至った。

僕が起きる頃にはすでに家を出ているのだから朝父の顔を見ないのは明日も今日までと変わらないという思いを込めて僕は曖昧に頷いた。

「これからは今までみたいな忙しさはないから」

「了解」

取りあえずそう返事をしたが、父の言いたいことが何なのか僕にはよく分からなかった。

朝起きたら父が優雅に朝ごはんを作っていることがあるかもしれないということか。週休二日が確保されるということか。入院している母に面会する時間は取れるのか。

生温かいアジフライを食べながら待っていて父からは何一つ情報は何も得られなかった。

取りあえず発掘調査は一区切りついたということなのだろう。今後発掘チームがどういうことになるのか、いつになったら普段の暮らしに戻るのかは父にもまだ分かっていないのかもしれない。

「来週、実力テストがあるんだ」

「そうか」

「結果が出たら先生と進路についての面談があるんだって。先生が日程調整したいから電話が欲しいって」

「誰に？」

「父さんに」

「俺に？進路面談？・・・そう言えばお前受験生だったな」父は急に食欲をなくしたように手にしていた茶碗と箸をテーブルの上に置いた。「すまなかったな。ここのところ家のことはお前に任せっぱ



なしだった」

まるで古女房に言うような謝罪の言葉が返ってくると僕は気恥しくて慌てた。

「母さんのこともね」

しまったと思ったときには既に遅かった。非難めいたことを口にするつもりはなかったのに。

父は僕の前でいよいよ恐妻家のように畏まって頂垂れた。

「母さんにも悪いと思ってる」

父は突然茶碗に残ったご飯に味噌汁を掛け勢い良くかきこむと自分が使った食器を流しで洗い、僕がどこの高校を志望しているかを訊くこともなくそそくさと風呂に向かった。

実力テストの出来は可もなく不可もなくといったところだった。学年の順位は9位で辛うじてトップテンを守ったにとどまった。

夏休みに塾の夏期講習にも通いそれなりに頑張つて勉強したつもりだったから結果を見たときには期待外れの印象だった。しかし、思い返してみれば夏の暑さに負け何となくだらけて取組んでいたような気もする。僕だけに夏休みがあつたわけではなくみんなも努力しているのだからそんなに簡単に順位が上がるはずもない。

それでもこの調子でいけばK高校にはまず間違いなく合格できる。そう考えれば少し気持ちも楽になった。

僕は軽く両膝を叩いて立ち上がった。寝入った母さんを起こさないように「また明日」と小さく声をかけ静かに病室のドアを開く。

病院の外は空に膜を張つたような思いがけない薄暗さだった。来たときは空調の利いた病院に入つてもしばらく汗がひかないほど暑かつたのだが、今は僕の頬をひんやりとした空気が撫でていく。

見上げると南の空を煤が立ち込めたような不気味な雲が覆っていた。しかも止めようのないドミノ倒しのようなスピードでその面積は刻一刻と広がりを見せている。

夕立が来る。傘はない。

僕は慌てて自転車にまたがった。

院内に戻つてしばらく様子を見ようか。

一瞬躊躇したが、夕飯の準備を考えるとそうもいかない。耳をすませば大粒の雨が地面を叩きつける音が聞こえてきそうで背後から迫る雲の流れから逃げるようにペダルを踏みだした。

道路上に人影はまばらだった。誰もが雷様の登場を予想して家の中でおへそを隠してじっとしているのだろう。

僕は家路を自転車レースのコースに見立て空いた道をタイヤを唸らせて全速力で駆け抜けた。

顔に冷たいものを感じた。途端に夏の名残りの日差しに焼けたアスファルトが濡れて湿った土臭いにおいが立ち上りはじめる。

あと少しで家なのに。

しかし、手の甲や頬、首筋に空から降ってくる幾筋もの重い水滴が容赦なくぶつかって弾けていく。

あつという間に雨の幕に包まれてしまった僕は路肩に駐車している軽自動車进行を何とか避け全速力でマンションの敷地内に駆け込み自転車置き場の壁にぶつけるように自転車を突っ込んだ。

頭上に鞆をかざしながら建物に逃げ込んだときには手で払っても焼け石に水というぐらいに服が濡れてしまっていた。ズボンからハンカチを取り出して顔を拭おうかと思ったが面倒になって階段を駆け上がった。

ドアに鍵を差し込んで違和感を覚える。

鍵を開けなくてもノブを回すとドアは簡単に開いた。

中を覗くと父親の革靴の隣に見慣れない女性もののパンプスが並んでいる。

「雨に降られちゃったでしょー」

僕は廊下の奥からスリッパを鳴らして駆け寄ってくる人に目を凝らした。

母さん。

母さんが僕の手にはタオルを握らせる。そして自分でもタオルを使って僕の頭や肩を拭ってくれる。

不意に目頭が熱くなって視界が霞む。髪から伝う雫が目に入りぼやけて見えるのか。

僕は洗剤の匂いがするタオルに顔を押し付けた。

「早く着替えてこい。風邪ひくぞ」

顔を起こすとワイシャツにスラックスという最近あまり見ることのなかったこざっぱりした格好の父が立っていた。その横にいるのは……坂本先生だ。

「先生」

僕はどうして坂本先生を母さんに見間違えたのだろう。病院にいる母さんが家でこんな風に出迎えてくれるはずなのに。

「今日はたまたま仕事の都合がついたから先生に家庭訪問に来ていただいたんだ」

父の言葉はどこか言い訳がましく聞こえた。

時間ができたのならまず何をおいても母さんの見舞いに行くべきじゃないか。そう言いたくなったが、僕の進路面談のために時間を割いてくれたのだからと思うと頷くしかなかった。

坂本先生はリビングに入っていたかと思うと鞆を手に戻ってきた。

「では、私はそろそろ失礼いたします」

「あ、ああ。そうですか。今日はご足労いただきましてありがとうございます」

父と坂本先生が話しているのを見るのはどこか不思議な感じがした。

当然ながら二人とも僕はよく知っているが、父は家の中、坂本先生は学校でしか存在せず登場がシンクロすることはなかった。それが今、僕の目の前で二人が会話している現実にくまなく僕がフィットできていないようだ。

「いえ、とんでもございません。私の方こそ忙しいのに貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございます」

「よろしければ、発掘現場の方へもお越しください。案内させていただきますので」

「ありがとうございます。ぜひ、よろしく願います」

頭を下げ合う二人の大人。僕はタオルを使いながら部外者の感覚でそれを眺める。

社交辞令の応酬。空虚な芝居臭さ。「そろそろ時間だから帰るね」「じゃあな」で終わることにどれだけ時間をかけるのか。大人になれば僕もこんな風に口先だけの言葉のやり取りのスキルが身につくのだろうか。

「雨、降ってますけど」

僕も大人のやり取りにそろりと顔を出した。言ったらまた一しきり芝居続行となるのは分っていたけど、ずぶ濡れで突っ立っているのに指摘しないのもおかしいかなと思って。

「あ、そうだった。先生、雨が止むまでもう少しゆっくりしていかれたら」

「お気遣いありがとうございます。でも今日は車で来ておりますので大丈夫です。まだ仕事も残っておりますし」

「そうですか。それではお氣をつけてお帰りください」

にじるようなゆっくりとした動き。二人が息を合わせて玄関に近づいていく様は見事だった。

ドアが閉まるまでいったい何度お辞儀をし合っただろう。大人って面倒くさい。

僕は髪から滴る水の流れをタオルで拭いながらリビングに入った。

いつもと違う匂いがあった。坂本先生の残り香だ。

学校ですれ違う時には何も思わないのに、ここで嗅ぐと何となく大人の女の艶めかしさが感じられるようで僕は慌てて自分の部屋に逃げ込んだ。

休日の昼間に父親が家にいる。

それは当たり前のことのようでもあるが、その現実に対して何となく構えている自分がいる。

発掘に駆り出される前の状態に戻っただけなのに、どこか自然に振舞えないのは何故だろう。

慣れの問題だけなのだろうか。家族とさえど一年のブランクというのは一足飛びには埋めることができない時間ということなのかもしれない。

「このグループ、人気があるのか？」

昼ご飯に僕が作った焼きそばを頬張りつつテレビに視線を送りながら父が訊ねてくる。

映っているのは僕とそんなに年齢の変わらない女の子十人で構成されている最近売れ出したアイドルグループだ。どの子も激戦のオーディションを潜り抜けた自信とプライドが窺い知れる磨き上げられた笑顔を振りまき飛び跳ねながら歌っていた。僕は彼女たちの名前と顔が一致しないのだが、クラスの中では「あの中で誰が一番可愛いと思う？」「そうだなあ、俺はやっぱり……」という会話が頻繁になされている。

それにしても以前の父はこんな実のないことを僕に訊いたのだろうか。

そして一年前の僕は父に返答することがこんなにも面倒臭いと思っていただろうか。

「知らない」

自分でも驚くほど乾いた返事。口にしてみると一年前まではこんな口のきき方をしたことはなかったということがはつきり理解できる。

向かい合っている父も驚いたのかテレビから僕の顔に視線を移し

てきたのが目の端で分かった。僕はキュツと胃が窄まるような感覚を覚えながらその視線を無視して焼きそばを噛み潰し続けた。

やはり何かが違う。

この一年間で僕の内面が反抗的で自立的な成長を遂げたのか、それとも子供の親離れに父の気持ち追いつかないのか。とにかくぐくしゃくした余所余所しい会話と、外のうだるような暑さとは裏腹の肌寒く重い空気はどうにも居心地が悪かった。

そのとき家の電話が鳴った。

固定電話に掛かってくるとすれば父の仕事の関係か、そうでなければ化粧品や教材の押し売り勧誘だ。どちらにせよ僕には関係ない。それでもこれまでの習性で出ようかと思っただけ僕が箸を置くと父がお茶でのどを通し、僕を手で制して立ち上がった、

僕は受話器を上げる父の背中を見ながら静かにだが大量に肺の奥から空気を吐き出した。

どうにも息が詰まる。

発掘が新たな展開になったから今から来てくれ、という内容の電話ならいいな。そうでなかったら図書館に行つてくるとでも言い繕つて外に出よう。受験生には勉強という大義名分がある。

しかし、父は「ちよつと待ってね」と軽い口調で相手に告げ、あっさり保留ボタンを押して意味ありげに口元を歪めて僕を振り返つた。

「光太郎、お前にだぞ。女の子から」

一瞬にして顔から火が出た。焙られたように顔が熱い。

女の子から電話が掛かってくるなんて人生初だ。

誰だろう。どんな用件だろう。

しかし、携帯ではなく固定電話にというのが良く分からない。今度はなおさら父の目を見ることができず俯き加減で電話の前まで行く。

コードレスの受話器を取り、上ずる声で応対すると相手は西堀と名乗った。全くピンとこない。

「西堀さん？えつと……」

「この夏から美術部の部長をやらせてもらってます」ということは二年生か。

真面目に美術室に出入りしていれば文化部と言えど同じ部内だから違う学年でも交流はあるのだが、熱心とは程遠かった僕は同学年の部員ですら大した会話をした記憶がない。見れば思い出すかもしれないが西堀という名前と声だけでは彼女のことは何の印象も浮かんでこなかった。

うちの電話番号はおおかた部員名簿で探したのだろう。それにしても部長さんが引退した幽霊部員の僕なんかにどうして電話を掛けてくるのか。

僕の背後で父が焼きそばを啜る音がする。僕は子機を耳にあてたままりビングを出た。

「俺に何か用？」

「すみません、突然お電話なんかしちゃって。少し伺いたいことがあったんですけど、でも学校で三年生の階に行くのってかなり勇気が必要で」

それは理解できる。

中学生にとって一歳の差は絶対的なもので、違う学年の領域に乗り込むのは敵地に足を踏み入れるような感覚になる。降り注がれる視線は鋭く冷たい。その疎外感たるやまさに針のむしろだ。

「そりゃそうだね」

「はい。それで、あの……」

彼女が黙ってしまったって妙な間ができあがり僕を動揺させる。だからと言って沈黙の理由が分からなければ掛ける言葉も見当たらない。彼女がわざわざ電話をしてきたのは何のためだろう。

僕は自室に入り後ろ手で静かにドアを閉めた。

僕に告白？まさか。

しかし、一旦辿りついてしまったその思考に僕の心は勝手に高揚した。高鳴り出した胸のドキドキが受話器越しに聞こえてしまっ



いないだろうか。

好きです、先輩。

そんなこと言われたらどうしよう。西堀、西堀……。かわいい子かな。

いくら不真面目だったとは言え全く参加していなかったわけではないのだから美術室内で顔を合わすことはあつたはずだが……。大所帯でもないのにやはり何も思い出せない。

今日の電話での受け答えだけ取ってみれば丁寧な口調から悪い印象は全くない。とりあえず会ってみて…。

「佐伯さんって知ってますか？」

「佐伯？」やっぱり僕に告白ではなかったようだ。背骨を抜かれたように力が抜けて僕はベッドに転がり込んだ。仰向けに寝そべると投げやりな声が出てしまう。「同じクラスだから、そりゃ知ってるけど」

そう言えば佐伯とは梶田先生を探しに美術準備室に同行したとき以来ろくに話はしていない。その後どうしているのだろうか。

美術室を使わせてもらいたいと願い出て、梶田先生も案の定二つ返事であつさり許可していたが。美術部の部長から佐伯の名前が出てくるということは本当に部活に参加しているということなのだろうか。

「どういう人ですか？」

「どういふって言われてもなあ」

彼女が転校してきてからまだ半月ほどしか経っておらず、彼女について何かを語るほどの知識は全くない。強いて言えば何を考えているか分からなくて怖いということなのだが、そんなマイナスイメージは伝えづらい。

「会話されたことあります？」

「少しだけ」

「普通ですか？」

ものすごく曖昧な問いかけにどう答えたものかと逡巡する。

佐伯との数少ないやり取りを思い出してみると僕の中での普通の定義からはかなりはみ出しているような気がするが。

「普段は無口で外見は少しとっつきにくい感じはするけど、話せば結構フランクだよ」

モノは言いようだ。受験生にもなるとこつという言い回しができるようになる。

「そうなんですか。良かった」受話器の向こうから、少し安心した、という感情が伝わってきて、逆に僕は若干不安になった。「佐伯さんって見た目的に怖そうな感じがしたんで、ちよつとほつとしました」

やっぱり。

僕の雅な表現の仕方では彼女のサディスティックで強引な性格を包みこんだオブラートがちよつと厚すぎたようだ。

「何かあったの？」

「あのですね……」言にくそうに口ごもる。「最近ちょこちょこ放課後に佐伯さんが美術室に現れるんです。それで二時間ほど絵を描いていかれるんですけど、その、ちよつと……」

「ちよつと、どうしたの？」

「私は別にいいと思うんですけど部のイーゼルを使つてらっしゃるんです。あと準備室に置いてある部員の画材を勝手に使ったりも。

挨拶して無視されたつて言う子もいます。それで部員から、部長なんだから一言言つてくれつて言われて正直困つちゃつて……」

「なるほど」

僕は思わず唸つた。さもありません。

佐伯は周囲の気持ちを忖度するという面が欠けているように思う。きつと彼女にも他の生徒をないがしろにするつもりはないのだろうけれど。

「こんなこと言つたらなんですけど美術部の部長つて運動部の部長と比べると形だけのもので大した役割ないじゃないですか。やることつて言つたら部費と美術準備室の鍵の管理ぐらいで。だから軽い

気持ちで引き受けたんですよ。これで内申点が上がるのならラッキーかもみたいな感じだったんです。だから部長になって早々にこんな事件が起きるなんて思ってもみなくて。だから私……」

僕は受話器を耳から少し離れた。

西堀は喋り好きなのだろう。僕はまだ打ち解けたつもりはないのにベテランの講師のように息つくことなくどんどん言葉を浴びせてくる彼女の声が少し耳にうるさくなってきた。だからと言って無下に電話を切ることもできない。

僕はベッドから身を起こした。

事件という表現はちよつと大げさな気もするが、彼女の我が身の不運を嘆く気持ちは理解できる。相手があの佐伯でさえなければ彼女にとつても「事件」とまではならなかったのかもしれない。

僕だつてクラスメイトでありながら佐伯に話しかけるのは勇気が要ることであれば避けて通りたい。僕が西堀の立場だつたらと考えると背中が寒くなるようだった。

それに女の子と電話をする機会なんて初めてのことで、異性とのコンタクトに免疫がない僕にとつてはこれは非常に貴重な経験であることは間違いない。しかももし西堀がそれなりのルックスだったとしたらここで彼女と仲良くなつておくことは僕に残された中学生生活において損であるはずはない。

お喋りは女性共通の特性なのかもしれない。少しぐらい耳がキンキンしたつてここはひとつ先輩として彼女の悩みを真剣に受け止めてあげよう。

「……そうしたら仁科が何とかしてくれるつて」

「は？俺が何だつて？」

彼女の話に注意を戻した途端に僕の名前が出てきて僕は思わず声を出していた。

「もう。先輩、私の話聞いてくれてました？」

「もちろん聞いてたけどいきなり名前を呼ばれたからちよつとびっくりしちゃつて。ハハハ……。で、どうして俺が出てきたんだっけ

？」

「いきなりじゃないですよ。ですから、困って梶田先生に相談してみたんです。いくら幽霊とは言え一応美術部の顧問なので。そうしたら梶田先生が一言、佐伯を美術部に勧誘したのは仁科だから仁科が何とかしてくれる、って。だから今日先輩に電話してるんです。お願いします。何とかしてください」

「ちょ、ちょっと待って。俺は別に佐伯を勧誘なんかしてないって、それは間違いない。佐伯に脅されて梶田先生の所まで案内させられただけだ。」

「でも、先生は先輩が佐伯さんを連れてきたって言うてましたよ」「それはそうだけど」

「こんなこと言ったら失礼かもしれないですけど、美術部OBとして勧誘なさった以上先輩にも責任があると思うんです」

電話なのに実際に目の前で西堀から詰め寄られているような圧迫感を受ける。僕はその、後には退けないという部長の使命感のような気迫にたじろいでいた。

責任ねえ。

思いがけず後輩から突き上げを食らい突然中学生にはなじみのない言葉が僕の心に重くのしかかってきた。僕は生れて初めて他人のことに對して責任を果たさなくてはいけなくなってしまうたようだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0326z/>

---

ジョーンブリヤン

2011年12月5日22時49分発行